

## 奈良県スポーツ推進審議会第1回定例会 議事録

1 日時 平成24年4月9日（月）14:30～16:40

2 場所 奈良市池之町3 猿沢荘3階 わかくさ

### 3 出席者

(委員) 朝原 宣治 : 大阪ガス株式会社 近畿圏部地域活力創造チーム副課長  
泉本 憲人 : 株式会社アクアティック社長  
岡下 守正 : 奈良県町村会代表 大淀町長  
尾崎 充典 : 奈良県議会 文教くらし委員長  
笠次 良爾 : 奈良教育大学教授  
川崎 香織 : NPO法人川西スポーツクラブ理事  
佐久間 春夫 : 立命館大学教授  
辰野 勇 : 株式会社モンベル会長  
根木 慎志 : アスリートネットワーク理事  
稗田 甲二 : 株式会社アシックス執行役員  
福井 基雄 : 芝運動公園スポーツクラブ会長  
細川 伸二 : 天理大学教授  
牧川 優 : 園田学園女子大学教授  
南 佳策 : 奈良県市長会代表 天理市長  
横山 文人 : 亜細亜大学准教授 (五十音順、敬称略)

荒井奈良県知事

影山くらし創造部長

西谷くらし創造部次長

(事務局) 土井障害福祉課長

杉山長寿社会課長

橋本健康づくり推進課長

堀内道路交通環境課長

柴田教育委員会保健体育課長

吉田スポーツ振興課長

中和田スポーツ振興課長補佐 (司会)

#### 4 議題

- (1) 奈良県のスポーツに関する状況
- (2) 「なら運動・スポーツ振興プラン」の概要と取組状況
- (3) 国の「スポーツ基本計画」の概要
- (4) 新しいスポーツ推進計画策定に向けた基本的な考え方
- (5) 意見交換
- (6) その他

#### 5 議事概要

中和田

ただいまから、平成24年度奈良県スポーツ推進審議会第1回定例会を開催します。（開会宣言）

それでは、最初に、荒井正吾奈良県知事から、ごあいさつ申し上げます。

知 事

本日は、平成24年度奈良県スポーツ推進審議会第1回定例会にご出席いただき、ありがとうございます。

これまで、奈良県は、スポーツ振興に力を入れてこなかったと言われておりますが、一面ではそのような面もあったようにも感じています。ただ、スポーツは大事なので力を入れてやっていこうと思い、これまで取り組んできました。

奈良県は、全国でプロスポーツのない3県のうちの一つとなっています。大阪に隣接していることも理由だと思いますが、一流のアスリートに触れる機会が少なく、学校の体育は盛んであるが、大学スポーツ、社会人スポーツ、プロスポーツがなくて、その結果、全体としてスポーツに触れる機会が少ないこととなってしまっています。

このことから、取組のまず一つとして、奈良マラソンや若草山ヒルクライムといったスポーツイベントを開催しました。これらの大会を目指して普段からスポーツを行っているという声も聞くので、スポーツの裾野を広げる効果があったのではないかと感じています。スポーツの持つすばらしい効用が表われはじめているのではないのでしょうか。

「スポーツの裾野を広げる」という点では、これまでのように学校スポーツ中心ではなく、クラブスポーツであったり、サイクリングであったり、ウォーキングであったり、これらが今後、重要になると思います。

もう一つは、奈良県はスポーツ施設が十分ではない状態にあることから、新しい奈良県のスポーツ推進計画の中に「スポーツ施設の充実」を盛り込んでいきたいと考えております。これまでイベントの開催は行ってきましたが、施設の充実

なしに、イベントだけではスポーツの振興には足りないと考えております。大規模なスポーツ施設の整備は夢であるが、きっと実現できると考えています。また、大規模な施設の整備と同時に、身近なスポーツ施設の再生も必要です。これまでも高校跡地へのサッカー場整備への補助などを行ってきました。

これから、奈良のスポーツの新時代をつくりたいと考えているので、是非スポーツの振興のために力を貸していただきたい。よろしくお願いします。

中和田

この審議会には、15名の委員の方々に就任いただいております。それでは、ご就任いただきました委員の皆様をご紹介させていただきます。

— 委員紹介（略） —

以上の皆様でございます。本日は、ご多忙にかかわらず、ご出席いただきありがとうございます。

続きまして、先程、ごあいさついたしました荒井知事でございます。また、くらし創造部影山部長でございます。同じく、西谷次長でございます。

次に、事務局の職員を紹介させていただきます。

— 事務局員紹介（略） —

それでは、まず最初に、会長及び副会長の選出をお願いします。

なお、会長及び副会長は、委員の互選となっております。まず、会長のご推薦をお願いします。委員皆様からのご推薦はございませんでしょうか。

委員

奈良女子大学にお勤めの頃から、本県のスポーツ事情に詳しく、現在、立命館大学でもスポーツ科学を専門に研究をしておられますので、佐久間委員にお願いしたいと思います。

中和田

ただ今、会長に、佐久間委員のご推薦をいただきましたが、いかがでしょうか。

委員

異議なし（拍手多数）

中和田

異議なしとのご発言をいただきました。ありがとうございます。  
それでは、佐久間委員、会長をお引き受けいただけますでしょうか。

佐久間委員

はい。よろしくお願いいたします。

中和田

それでは、佐久間会長、会長席へどうぞ。  
ここからは、佐久間会長に進行をお願いし、副会長の選出をお願いします。



- 佐久間会長 | 議事に先立ちまして、議事録署名委員を指名させていただきます。  
川崎委員、笠次委員にお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。  
それでは、議事に入ります。第1号議案から第4号議案までについて、一括して事務局より説明をしていただきます。
- 吉田課長 | スポーツ振興課長の吉田でございます。私から、第1号議案から第4号議案までについて、資料を基にご説明させていただきます。  
奈良県のスポーツに関する状況、なら運動・スポーツ振興プランの概要と取組状況、国のスポーツ基本計画の概要、新しいスポーツ推進計画策定に向けた基本的な考え方について、資料2から資料5までを基に説明させていただきます。  
—説明（略）—
- 佐久間会長 | ただいま、事務局から説明のあった事項について、何かご意見等、頂戴できればと思います。
- 南委員 | 現在、奈良県では、地域のスポーツクラブを数年前から推進されておられます。天理市でも一つのクラブがスタートし、もう一つが最後の詰めの状況と聞いています。  
今、この件について、県内の動きはどのようなレベルになっているのでしょうか。
- 吉田課長 | 資料にもありますとおり、県内には51のクラブが現在活動している、又は活動に向けて準備しているところでございます。  
昨年度はクラブ間同士でいろんなイベントを実施したり、発表会をしたり、いろいろな取り組みが現在進んでおります。
- 南委員 | 天理市も、総合型地域スポーツクラブの取り組みは比較的早くに始めたと思うのですが、もう少し各地域でこういうことをアピールする、こういう広報の取り組みをしっかりとやっていかないといけない。  
この資料についての説明を受けて、設立済みのクラブが51あると聞きまして、市をあげてもっともっとやっていきたいと思っております。  
クラブの振興については、アピールすることも大事で、地道にやっていたらあまり分かってもらえない。天理市は、県内でいち早く手を挙げさせてもらった記憶があるんですが、ちょっとその中だるみのような感じがしています。

- 佐久間会長 | 天理市の、現状等踏まえて、ご意見いただきましたけれども、確かにクラブを最初に立ち上げるときは、割とスムーズに行くんですけど、継続して運営していくことは非常に難しく、それをサポートする人をできるだけフォローアップして、また、参加する人に対しても動機付けが必要だと感じています。そうでないと、だんだん尻すぼみになってしまいます。
- すみませんが、資料中の競技レベルの高い種目の見方について、もう一度詳しく説明していただけますか。
- 吉田課長 | 失礼いたしました。ご説明させていただきます。
- ソフトテニスの場合は、そのまま大学まで引き続いて高い競技力で継続して行っているところがない、ということでございます。
- 例えば、バドミントンについて見ていただきますと、本県の場合、小学校が結構盛んにやっております、卓球もそうなのですけれども、そのまま中学で同じように盛んに継続しているかといいますと、他県に選手が流れるというような状況があります。小学校と同様には、中学で熱心に取り組んでおらず、高い競技レベルを維持できていないというような見方をしていただければと思います。
- 佐久間会長 | 陸上、水泳及び柔道については、競技の受け皿としての大学が存在しているという理解でよろしいでしょうか。
- 吉田課長 | 陸上、水泳及び柔道は、本県の場合は天理大学になるわけですけれども、競技力が高いレベルで実施されているということになります。
- 佐久間会長 | 高校でそういう有望な選手が辞めるというわけじゃなくて、他府県に進学していくっていう、理解をしてよろしいですか。
- 吉田課長 | そういうことでございます。
- 佐久間会長 | 委員の方々から何かご意見等、ございませんでしょうか。
- これからの施策等についてのご意見を伺いたいと思っております。
- 辰野委員 | ずっとお話をお伺いして、競技スポーツと生涯スポーツという大きく二つに分けられると思うんですけど、両者のうち、特に県としてのどちらに重点を置かれるかというところがですね、少しご説明していただければと思っております。
- 佐久間会長 | 資料にも記載がありますが、競技スポーツ、生涯スポーツ、それから子どもた

ちのスポーツ、特にどれが一番といったことではっていうのはないのかもしれませんが、特に当面の方向としてはいずれを重視するのかというところは、どうでしょうか。

吉田課長

競技スポーツ、生涯スポーツという二者択一といいたいまいしょうか、どちらを取るか、どちらに重きを置くかということなんですけど、当然、ご説明したとおり、「いつでも、どこでも、誰でも」という基本目標を掲げていますので、生涯スポーツの振興ということになるかと思えます。ただ、生涯スポーツの振興を広げていきますと当然、競技レベルも上がっていくもの、上がっていくべきものであって、両方しっかり取り組んで行くべきものだと考えております。

佐久間会長

はい、種目の違いはあるとしても、例えば、富士山と同じように、裾野を広くしなければ頭部も高くなっていかないという考え方があると思えます。このことから、底辺であるスポーツ人口を増やすということも、重要じゃないかと個人的には思っています。

また、県南部の山々を活用してアウトドアエデュケーションのメッカにできるのではないかと。アメリカ並みにキャンプなどを振興して、自然に触れてリーダーシップ、フォロアシップ等を養っていければいいと、考えています。

川崎委員

よろしいでしょうか。総合型地域スポーツクラブの運営に携わっています川崎です。川西スポーツクラブでは、約9,000人の川西町の人口に対して、820人の会員が在籍し、運動、スポーツをしています。

会員に対しては、幼稚園児からスタートして小学校、中学校というような形で、上へ行けばゆくほど伸びてゆけるように、長く細くスポーツを続けていけるようにと考えて指導しています。先程、会長が仰ったように、まず裾野を広げていくことが重要かと思えます。

裾野を広げていくと、光る子ども達がいるわけですね、そういった光った子ども、原石を拾い上げて、一貫教育しようという目的で、幼稚園、小学校の会員の指導者は、同じ者を主に当てるようなシステムにしています。このような方針で運営している間に、年輩の会員の中からの要望を受け、ゲートボールやグランドゴルフに加え、健康体操、太極拳など、より健康面に重点を置いたカリキュラムに考慮した教室を開催することにもなりました。

また、小さいお子さんをお持ちのお母さん方は、なかなか外出しにくいということで、託児所を設置して、スポーツ、運動を行っていただいています。

このように、総合型地域スポーツクラブは、生活の中で密着しながら、裾野を広げていくことが重要であって、それを根本に据えなければならないと考えてい

ます。

また、昨年、ドイツへの研修に行きまして、オリンピックを目指す子どもを養成する機関が日本よりずっと整っているほか、高齢化社会の影響で健康志向と、あと美的志向にニーズが変わってきていることを実感しました。

佐久間会長      ありがとうございます。総合型地域スポーツクラブの代表としての川崎委員の方からご意見いただきました。同じお立場の福井委員からも、ご意見ございますでしょうか。

牧川委員          会長、少しよろしいですか。川崎委員にお聞きしたいんですけども、800人の会員の年齢構成はどうなってますか。

川崎委員          年齢構成については、資料を持ってこなかったのですが具体的な数字は申し上げられないのですが、幼稚園児と小学生で、約300人から350人、中学生はどうしてもクラブ活動が中心になって、少なくなります。

川西町の中学校は、隣接する三宅町との組合立の中学校です。クラブの種目が少ないという現状があります。例えば、バスケットボールやサッカーをしたいんですけども、そのクラブ活動がない。そこで、スポーツクラブが受け皿になることはできないか、教育委員会も巻き込んで、学校の放課後のクラブを、スポーツクラブで見させていただいたらいいんじゃないかというような企画も検討している段階です。

牧川委員          会員で、高齢者の方は、どれくらいいらっしゃるんですか。

川崎委員          グランドゴルフの会員で約70人、健康体操やヘルスキーピングなどを合わせますと、約200人に達すると思います。

牧川委員          会員として、小さい子どもからお年寄りまで入られているということですね。

川崎委員          そうですね。ただ、30代から40代、50代の前半くらいまでの働き盛りの方が、どうしても参加率が悪いです。

牧川委員          スポーツを振興するためには、ハードとしてのスポーツ施設、ソフトとしての大会や各種プログラム等によるスポーツの機会、ヒューマンとしてのスポーツの仲間やスポーツのクラブが必要になってくると思います。その中でも、スポーツ振興の手掛かりとしては、総合型地域スポーツクラブは非常に良いのではと思



ます。少子化で、学校の統廃合が進んでいます。空いている小学校や中学校の施設をうまく活用すれば、スポーツの場が確保できます。高齢者の方も参加願えば地域コミュニティの活性化につながってきます。そのような意味で、総合型地域スポーツクラブの育成をスポーツ振興の柱の一つにしてもいいと思います。

佐久間会長

確かにそうです。

小学校から高等学校までは、地域の中心的な場所ですから、有効活用できれば非常にベストかと思います。

また、トップアスリートのために、大会などを誘致するために必要な運動施設で、県の顔になる施設も必要と感じています。

総合型地域スポーツクラブの現状等について、福井委員からご意見いただけませんかでしょうか。

福井委員

失礼いたします。総合型地域スポーツクラブについて、桜井市の現状をご説明させていただきます。桜井市においては、桜井市体育協会と総合型地域スポーツクラブの両輪で動かしております。

現在、総合型地域スポーツクラブは、芝運動公園スポーツクラブになっておりますけれど、平成18年からスタートしまして、昨日現在で、936名の会員数です。

市内のほかの地域でも活発に活動していきまして、来年には12地域についてそれぞれ総合型地域スポーツクラブが設立できると思います。

会員は、3歳児から幼稚園までが約13%、小学校1年生から6年生まで約30%、中学生がやはり少なくなっておりまして、一般会員が約50%となっております。

なお、これらの会員については、全て有料会員制をとっております。

クラブの会員は、設立当初約200名からのスタートでしたが、会員からの要望をアンケートで聴き取り、教室を増やして、現在はクラブ、教室等を約30近く設置しています。

佐久間会長

教室等は、30近くあるんですか。失礼ですけれども指導者が不足しているような状況はないですか。

福井委員

先生方、県の方々と連絡を取り合い、良い指導者に来ていただいています。

佐久間会長

ありがとうございました。まず裾野を広げるという観点から、お伺いしましたが、これがトップアスリートに繋がっていくと非常にありがたいということにな

ります。そこで、トップアスリートの立場から、朝原委員いかがでしょうか。

朝原委員

私は、トップアスリートに結果的になったんですが、もちろん一貫指導というのは素晴らしいと思うんです。ただ、どちらかというとな体を動かす楽しさとか、自由に遊ぶことができる環境の中から、体力をつけていったり、子ども達同士でのコミュニケーションを取ったりすることができるのではないかと考えています。

そういう基礎的なものがあるって、その結果、競技スポーツをして、強くなるっていう順番が一番理想です。スポーツも大事なんですけど、子ども達が安全な場所、自由に遊べる環境があれば非常にいいかなと考えています。

今、トラッククラブに携わっていて、子ども達にも、いろいろな目的があって、それぞれに考えていることが異なるということは感じます。トップになりたい子は、当然一生懸命なんですけど、競争が嫌いな子も結構いるんですね。そういう子ども達が自由に楽しくできるには、どうしたらいいかなって日々考えています。

子ども達の根本的な力を伸ばすためには、自主的に自分たちで動いて、これって楽しいなって思うことが一番です。体を動かして子ども達に楽しさを知らない、年齢を重ねてからは、じゃあ運動しようかななんて思わないのではないのでしょうか。

私も、このことについては、これから長く考えていきたいと思います。

佐久間会長

ありがとうございました。私も朝原委員の考えと全く同様なんですけれど、日常生活と遊びとの連続性がないがために、長続きしないという印象は受けています。

同じくトップアスリートの立場から、根木委員からご意見をお願いします。

根木委員

アスリートネットワークの根木と申します。

私は、車いすバスケットボールのシドニーパラリンピックのキャプテンをさせていただいておりました。

まず、アスリートネットワークについてですが、アスリート、トップアスリートが自分達の経験したことを次世代の子ども達に伝えていくという趣旨で結成された団体です。

先程、競技スポーツと生涯スポーツという話がありましたが、私は、両方とも本当に大切なことだと思っています。記憶にはありませんが、私の生まれた年に東京オリンピック・パラリンピックが開催され、それが日本であったということによって、スポーツの持つ力で国民が強く、元気になったのは事実だと思います。

アスリート、トップアスリートがいることによって、いろんな影響があると思いますし、スポーツを始める動機付けの中の、全てではないかもしれませんが、生でアスリートの競技を見ることによって、「すごいな」と、そこでスポーツを始めたいなという子ども達もいるでしょう。また、国際大会が奈良県で行われるとか、自分達の住んでる町にプロスポーツがあるということで、そこを目指そうかな、と思ったりすることもあるのかなと思います。

私自身は、小学校時には柔道をやっていた、中学校は水泳、高等学校はサッカーしていましたが、怪我をしてスポーツは全くできなくなって、スポーツ大好きな人間がスポーツできなくなって、もう人生終わったなというのを18歳の時に思ったんですね。たまたま、私は、入院していた病院で車椅子バスケットボールをしている方に、お声掛けしていただき、そこから奈良県のクラブチームに入りました。ちょうどそのクラブチームが全国大会を目指しているという状況があり、わかくさ国体、障害者スポーツ大会もその後すぐあったことから、スポーツをするきっかけができました。私自身もスポーツで人生が変わり、自分自身がこうしてこの場に居られるのも、スポーツの力なのかなという思いです。

このことから、本当にいろんな面で、スポーツができる環境であったり、それを見ることが出来る環境っていうのがすごく大切だと感じています。

障害者スポーツに関して説明すると、奈良県でもパラリンピックの出場者は多数存在するのですが、環境面は他府県と比べてかなり厳しい状況にあるのが事実です。総合型地域スポーツクラブがまさしくスポーツを手軽にできる環境に当たるとは思いますが、これからも障害があろうとなかろうと関係なしにスポーツができる環境の整備ということ基本に据えて考えていきたいと思っています。

佐久間会長

ありがとうございました。

非常に課題は大きいなと思いますが、スポーツの持つ教育力といいますか、ある意味では生きる力を含めて人間力と言えるかもしれません。まさに根木委員の言葉には非常に、私には響くものがあります。

やはり、スポーツの持つ楽しさは何とかして広めていきたい。私が障害者スポーツ指導員の資格を60歳になってから取得したのもそのような思いからです。スポーツ、運動の持つ素晴らしさっていうのを実感してもらいたいなと思います。

少し余談になってしまいました。同じくトップアスリートの、特に国際化の面では、細川委員がご研究なさっているかと思うんですけど、県の資料等を元にご意見等を伺えればと思います。

細川委員

私は、昭和59年のわかくさ国体から奈良県にお世話になりまして、教員をし

ながら現役としても、国体を中心としまして、体育協会の方々とはいろいろ関わり合いをさせていただいてきました。

いわゆるトップアスリートの養成であったり、施設の問題であったり、あるいは選手の受け入れのことを、生意気だったんですが提案してきたつもりだったんですが、これまで全く動くような感じはしませんでした。

ただ、今日参加して資料を見て、これが本当に動き出すのであれば素晴らしいな、奈良県が一番になっていくんじゃないかなというように期待しております。何とかこの計画が実現できるように宜しくお願いしたいな、と思っております。

佐久間会長

大変、力強いご発言かと思えます。

それでは、またちょっと見方を変えまして、今まで、いろいろなご意見いただきましたけれども、企業側の方々からご意見いただきたいと思えます。泉本委員どうでしょうか。

泉本委員

泉本です。資料にもあります新県営プールは、従来の公共施設の建設方法ではなく PFI 手法が採用され、建設と建設後の運営を一体として発注する方式により整備されます。

私共のアクアテックがこの運営をさせていただくのですが、従来の行政の手法であれば、屋外プールは2か月間程度しか使われないとか、学校のプールであれば1か月も稼働しないというものもあります。これに対して、新県営プールにおける屋外の50mプールは、1年のうち約10か月ぐらい泳ぐことができるものとなります。温水にして、保温のためにアメリカから輸入するカバーを掛けるなど、いろいろな創意工夫をしています。

このように、民間の活力を利用して、このプールで生涯スポーツを振興するのはもちろんのこと、このプールでオリンピック選手を育てたいなという夢を、県の水泳連盟の理事長と語っているところでもあります。

オリンピック選手だけじゃなくて小学校、中学校、また幼稚園の子ども達にも泳ぐことのできる施設、そのほか、いろいろな施設を整備させていただいて、生涯スポーツと競技スポーツが共存共栄し、これからの奈良のスポーツが発展していけば良いと思っています。

そのほか、計画の策定に関しては、この審議会でも目標を設定して、どのようなことをしていけば、その目標を達成できるのかを具体的に決めていくのが重要かなと感じています。

佐久間会長

ありがとうございました。確かに基本的な施策といいますか、事項についてはいずれ具体的に数値目標をあげて推進していかなければいけないかと思えます。

続きまして、辰野委員にも企業側の立場からご意見いただければと思います。

辰野委員

モンベルという企業で、37年前から生涯スポーツとしてアウトドアスポーツを一生懸命やってきたんですが、むしろ今ここで言いたいのは、企業の立場と言うより個人的にアウトドアスポーツに関わってきたことについてです。

元々、山登りをずっとやってはいたんですが、ある時からカヌーに関わり、現在、日本カヌー連盟の常務理事を7年勤めさせていただいています。47都道府県にカヌー協会というのがあり、国体やオリンピックを目指す人達を育てています。

一方で、表彰台に上がれる成績が出ないという流れの中、カヌー連盟に提案をしたのは、48番目の新たな協会を作りましょう、ということです。これは、日本レクリエーションカヌー協会をカヌー連盟の中に敢えてつくって、先ほどから仰っておられる富士山の裾野の部分をちゃんとフォローをしていく必要があるということ。特に、カヌーは安全面に非常にリスクのあるスポーツですから、確実に初心者の方から教えていく指導システムを、全国47都道府県に、いわゆる県境を越えて我々が関わっていくという前提でつくったものです。

現在、その指導者を全国で養成して、頑張ってくれているわけですけど、他方で、今から20年前に五條の吉野川で障害者カヌーもスタートさせました。

五條の川に手作りで障害のある方にも乗れるもの、車いすでも十分楽しめるスポーツだということで、日本で初めて、五條で産声を上げました。その後、障害者カヌー協会を参加者が自主的にをつくられて、今年パラリンピックの種目として取り上げられるまでになっています。

カヌーは、非常にマイナーなスポーツですけど、奈良県には非常にフィールドとしてポテンシャルがあって、まして、障害者カヌーの発祥地という歴史的な事実もあります。このようなところも注視していただきたいと感じました。

競技スポーツ、特にカヌーを見ていると勝ち負け、勝てるうちはやるんですけど、競技をやめた途端にカヌー自体をやめてしまう状況が見受けられます。全部が全部ではないですけど、彼等は、カヌーに興味があるのじゃなく勝ち負けに興味があるのです。

要するに、勝った負けた、勝てる競技がやりたいというようにしか見えない、という状況があります。これに対して、生涯スポーツであれば、勝ち負けにこだわることなく、朝原さんがおっしゃったように、自然にスポーツが楽しいという環境の延長線上に頂点がある。頂点を上げることによって裾野も広がるので、それをいろんな意味で、企業としてもサポートしていきたいと思っています。

佐久間会長

辰野委員のお話から、奈良県の特性を活かした可能性が見えてきました。同じ

く企業の立場から、稗田委員にもご意見お願いします。

稗田委員

アシックスの稗田と申します。

商売柄スポーツ用品を売っていますので、少子高齢化の影響で、小学校、中学校、高等学校でスポーツをする人が非常に減っている、というのは売り上げの点からも、ひしひしと感じています。

日本のスポーツは、ある意味スクールスポーツですから、どちらかといえば、今までは、学校の先生のボランティアの上に成り立っていたのではないかと、ただ、今は、それが継続できなくなっているのだと思います。

そういう意味で、スポーツメーカーとしてはスポーツを普及することが非常に重要で、何とか裾野を広げたいと思っています。ただ、競技スポーツ人口は、将来絶対減っていくというふうにも見えています。

それでは、どこに力を入れていくかということ、例えば、高齢者向けスポーツへの対応です。ウォーキングであるとか、更にいうと、要介護者向けの商品であるとかですね、そういうようなところに目を向けています。

先程、辰野委員からもお話ありました、競技スポーツか、生涯スポーツかという、奈良県にとってどちらを選ぶかということですが、理想的には両方の振興なんです、やはり、両方とも全方位的には非常に難しいと思います。個人的な意見としては、奈良県にとっては、やはり南の豊かなアウトドアの環境を活かして、奈良県でしかできないような、「オンリーワン」を目指した形のスポーツの普及等を考えていったらいいんじゃないかと思っています。

あれもこれもは無理です、競技スポーツ「奈良県」のイメージは湧きませんし、やはりアウトドア。ここ一点でやったら非常に面白いと思います。

佐久間会長

企業代表の方々からいろいろ意見いただきました。このようなご意見を、今後、具体的に話していく上でも是非、行政の分野からおいでになっている委員の方々、ご意見等をいただきたいと思っています。まず、岡下委員お願いします。

岡下委員

私は、人口2万人弱の大淀町の町長をしております、経験がまだ1年半です。

知事は、奈良モデルの中で、総合型地域スポーツクラブを作りなさいということをおっしゃいますが、実は、大淀町はいまだにない、空白になっています。

実は、わかくさ国体の時に、大淀町にはオールシーズンタイプの芝生のグラウンドができています。ただ、町長として、先ほど天理市長さんも仰られていましたが、一番考えることは町の財政です。維持管理が大変なんです。クラブについては、真っ白ですけれども、ゲートボール場、グランドゴルフ場、パークゴルフ

場もありますし、ミズノさんに委託している町単独のプールがある健康づくりセンターもあります。

それを1本化すれば、総合型地域スポーツクラブはできる訳ですけど、その場合でも、まず財政を考えます。ただ、スポーツでお金を儲けようだなんて無理だと思ってますし、文化・スポーツは町がお金を出すものだ、税金で賄うものだと思います。

以前、サッカー競技の事務局長をボランティアでやっておりました、サッカー協会まで行き、3000人、2000人の集めて小学生のサッカー大会を10年間続けました。

私は、その時、仕事をしてまして、その仕事の売上げが6か月間、半分になったことを覚えています。そのように、殆どがボランティアに頼るところと想像していたのですが、今聞いていると皆さんお金を得て行っている。それで成り立っている訳なんですね。

補助金などはないのかと、一度お聞きしたかったんですが。

川崎委員

川西スポーツクラブについては、NPO法人でして、理事が5人いますが、全ての者が、無報酬です。ただ、事務局で常勤3名の職員を雇い、そのほかパートタイム職員、シルバー人材センターから派遣されて体育館の清掃等を行う方々がいます。

川西町から指定管理を受け、施設を管理運営してますが、川西町の場合、スポーツや文化的な事業に対して理解していただいていると感じています。ただ、NPO法人ですから、儲けるために指定管理を受ける訳ではなく、委託費については、あくまで職員の給料に充てられることとなります。

会員の料金については、普通の一般の企業に比べ、安価な金額を設定させていただいています。

これは、会員相互扶助の考え方で、川西スポーツクラブを運営しているからですが、ただやはり、100%ボランティアによる運営であると最終的な責任の所在が曖昧になります。そこで、今後も見据えて、若い人を事務局で雇うことが妥当と考え、先に述べましたとおり、事務局で3人を雇用しています。

岡下委員

ありがとうございます。

県から指導いただいて、今後ともスポーツ振興を進めていきたいと考えておりますので、よろしく申し上げます。

辰野委員

余計なこと、また言ってしまいそうなんですけど、助成金を頂いてNPOの運営、指定管理を受けておられるということですね。

- 川崎委員 今までは、日本スポーツ振興センター（toto）から助成金を受けて、その助成金頼りであったんですけど、これではいけないと、やはり助成金というのはいつかなくなると考えました。そこで、指定管理を受け、施設を管理する中でクラブを運営してっております。
- 辰野委員 指定管理をすると、行政から職員の給料を賄ってもらえるということですか。
- 川崎委員 選定は、入札で行われました。川西スポーツクラブは、NPO 法人として応募し、他に何社か企業の方からも話があったとのことですが、最終的には、川西スポーツクラブが指定管理を受けることとなりました。
- 辰野委員 なぜこういうことを申し上げるかといいますと、行政が持つ施設というのは、どうしてもやっぱり料金が安価になりますよね。  
これって、ひとつ間違えたら民間に対する営業的な圧力になるのではないのでしょうか。即ち、自助努力、自己完結できるような施設をやらない限りは、どこまでいっても予算が切られたら、それでお終い。  
そのような若い人が入っても途中で予算を切られた途端に路頭に迷うということにならないように。そのために、やはりある程度、応分の費用ををいただくということが必要と感じます。経営者の立場として、経済的なことは逃げて避けて通れませんから、民業圧迫にならないようにしていかないかと思いました。失礼しました。
- 佐久間委員 非常に今の話には難しい面もあると思うんですけど、個人的には、教育、科学、芸術、これはスポーツも含めてですけど、スポンサーがなければ非常に難しいんじゃないか、そういった面では県にもいろいろお願いしなければならないと考えています。
- 朝原委員 お金の話が出ましたので、私が社員として主催しているトラッククラブについても、少しご説明しようと思います。  
このクラブの会員が競技するために必要な施設は、会社が持つ陸上競技場を無償で借り受けて運営しています。運営のための人件費は、仕事として携わる私については給料で賄なわれていますが、その他のスタッフについては、子ども達からの会費で原則として賄っています。収支が赤字の場合は、会社が補填しているのですが、将来的には独立して運営できればよいと考えています。  
現在は、企業が人と場所を提供していますが、奈良県にもそのような施設があって、仮に有効活用されていないものがあるとしたら、有効活用を図るのも一つ



の方策ではないかと考えています。

もうひとつ、トップアスリートについて考える上で、一番重要なことは、トップアスリートのセカンドキャリアについてです。現在、企業が選手を抱えるというのは難しいので、選手がアスリートとして競技をして、将来的にはその競技を活かした仕事に就くという仕組みになれば良いと考えています。

そういうことで、トップアスリートが将来的に出身地に戻ってくるができる環境の整備も重要となります。奈良県も、出身のアスリートが奈良県に戻って来ることができるような施策を検討したほうがいいんじゃないかと思います。

佐久間会長 大変貴重なご意見ありがとうございました。続きまして尾崎議員から、特に県の文教くらし委員長としてのことも踏まえまして、ご意見をいただきたいと思います。

尾崎委員 奈良県議会の尾崎でございます。

川崎委員から、幼児期の子どもの遊びの中から基礎体力は養われる、との話があったように思います。それは、やはり芝生の中だと考えています。これについては、県で効果検証中であったかと思います。検証して、その効果がどうなるかをデータにしているところでございます。

地元は、香芝なんですが、スポーツ少年団としてメンバーが校区を越えてサッカーをしている。しかし、それぞれの中学校に行くとなると顧問の先生がいらっしゃらないため、サッカーを続けることができない。このあたりの事情を聞いていますと、顧問になり手がいない、又は経験者がいない、2つのクラブを掛けもっている、というようなことがあるようです。

それが、総合型地域スポーツクラブで受け皿になれば、地域の方々に支えていただけるのかな、と思います。小学校で一生懸命にやっていた、中学校は抜けて、高校は自分で選べますから、クラブの強いサッカーの強いところに行けることになるんですが、この中学校の3年間は子ども達にとっては致命的なものなのだなあと思いました。

佐久間会長 それではあの、先程ご質問いただきましたが、引き続き行政の立場から南委員をお願いします。

南委員 私も先程、総合型地域スポーツクラブの話申し上げました。

実は、天理市でも特定の地域は、それに乗ってくれているんです。

ですが、内情は大淀町の町長も仰られたように、グラウンドゴルフが非常に広

まりました。奈良県でもきちんとした施設は6、7年前に作られました。それがほぼ満杯なんです。満杯の種目は満杯なんです、その他の種目は寂しい限り。

沢山ある生涯のスポーツの限られた部分は元気で、残りはあまりそうじゃない、このジレンマをどうするか、私は、ああやっぱり、力不足だったなと思ってます。まだまだ何かを、各委員さんの仰ったいろんな思いをもう一回町の人にぶつけてみようと今考えています。

その上で、次の段階で、総合型地域スポーツクラブを天理市がいち早く名乗りを上げさせていただいた誇りもありますから、このままの状態で置いておきたくはありませんので、頑張ってみたいと思います。

佐久間会長

ありがとうございました。それでは、また違う分野の委員の方々からご意見を頂戴したいなと思います。学識経験者の立場から横山委員、お願いしたいと思えます。

横山委員

亜細亜大学の横山でございます。大学では、経営学部にも所属しております。学科をひとつ3年前に作りまして、ホスピタリティマネジメント学科という、おもてなしをビジネスにするという学科です。

私は、学校スポーツのしくみの中で育ちました。

学校スポーツから、地域のクラブスポーツ、それからトップアスリートの部分といわゆる競技スポーツ、生涯スポーツというのは、シームレスに繋がっているように思っておりません。

なぜかという、元々の目標が異なるからです。全く繋がってないというのではなくて、いくつかの細かい線がある生涯スポーツがあって、そういった細かい線の中にトップアスリートにいくことができる人達が出てくるんじゃないかな、と考えています。

かつては、学校スポーツが（スポーツ振興の大きな）役割を担っていたと思えます。

今はそうではないと私は感じています。そういったこともあり、10年位前にクラブマネジャーを養成する仕組みとカリキュラムを作りました。クラブマネジャーという、いわゆる人づくりです。

スポーツは、物質的な形を持っているものではありませんので、それを振興していく、簡単に言うとマーケティングですけども、売れる仕組みですね。ものを売る仕組みと、売れる仕組み、いわゆるサービスというものを、見えないものを売る仕組みって、ある部分は似ているんですけど、ある部分は異なっているんですね。そこの部分をうまく活用されて、プランニングにも応用されるといいんではないかと思っております。

かつて、宮城県のスポーツ整備計画、千葉県、千葉市のスポーツマスタープランニングのお手伝いさせていただいたんですけども、かつて経験していた中から言わせていただくと、一つは、県民ニーズが見えないということです。

いわゆるファクトをまとめられているんですが、ファクトというのは今あることです。プランニングというのは今回の場合は5年でおそらく提案されて解決されるというプランだと思ってしまうんですけども、その中に県民の方が本当に一体どういうように、奈良のスポーツというのに対して考えておられるのかなっていうことを把握するのが必要です。

特に、生涯スポーツには必要なんです。競技スポーツ、トップアスリートの場合は、いわゆる県民のニーズをベースにしてやってしまうとちょっと具合悪いことになってしまうことも結構あります。トップダウンでやった方が多いことが多いですね。

トップアスリートの施設については、どなたかが仰られたと思うんですがシンボリックじゃないと意味がありません。プロスポーツについては憧れというのが、ひとつのキーワードですね。

あのピッチに立ちたいとか、あそこの体育館に立ちたいとかそういう感情がモチベーションを上げる、ということなので、施設は、そんなに沢山いらんんです。1個か2個で全然構わない。それが日本の中で3本の指に入らないと意味がない。シンボリックというのは恐らくそういう意味です。

もう一つは、スポーツツーリズムというのをここに出されてたのが非常に興味深く、これは、観光庁が連絡協議会をつくりつつ、今進めています。

スポーツツーリズムは、いわゆるインバウンド、という外から来る方と、それからドメスティック、いわゆる県の中での移動というのを含めて活用することができると思います。先程、辰野委員がおっしゃられていたアウトドアのリソースも凄く奈良県にはあると思いますので、そこに呼び込む、という意味でも「アウトドア」と「トップアスリートが使えるようなシンボリックな施設」を連動させると結構面白いものができるんじゃないかなと拝見させていただきました。

最後に一つなんですけど、ここにあった方がいいなと個人的に思ったのが「人」です。

人づくりが見えません。基本的に箱を作る行政がずっと続いてきました。箱を作っても、実際それをメンテナンスする費用が非常に膨大な負担になっているという現状が多々あります。

実際に作るときには、そのトップアスリートのシンボリックなもの、そうではなくて、いわゆる生涯スポーツに転用できるものを作ればいいんですが、やはり施設は、人がいないと動かないです。

佐久間会長 貴重な提言ありがとうございました。続きましては、牧川委員、ちょっとまとめに近いような形で宜しくお願いします。

牧川委員 私は、園田学園女子大学でスポーツマネジメントを教えています。総合健康学科の学科長をしておりまして、保健体育と養護の教員を養成しております。また、スポーツ振興センターのセンター長をしておりまして、本学のスポーツの振興を進め、テニス部やソフトボール部などの支援をしております。

私は現在、宝塚市に住んでおります。市役所の前に大きな広場があります。単に広場で、遊具等はあまりありません。土日は非常に多くの方が、平日にしても地域の方がその場所で、思い思いに遊んでいます。もし、そこに、野球場を作っていたら、野球する人しか使えなくなりますし、普通の人の遊び場はなくなります。また、野球場を管理するのに費用もかかります。そのように思った時、県として、競技力向上のために、当然整備しなければならない施設もありますが、何でも作れば良いというものではないと思います。朝原さんも仰ったように、小さい子どもは広場で自由に遊ぶことが大好きですから、そのような環境を整えてあげることが十分に検討すべきだと思います。

そのような意味では、奈良県として、どのような理念で、スポーツを振興していくのかを考えることが大事だと思います。

また、奈良県の目指す目標として、健康長寿県奈良を目指すと書いてあります。アンケート調査の中の、奈良県のスポーツに関する状況では、日常の楽しみ・生きがいとして、40歳から64歳までは、旅行と回答しています。これをスポーツと組み合わせれば、スポーツツーリズムになります。このような方法で積極的に18.5%より伸ばしていくことも必要です。

また、単に健康づくりを意識すれば、何もスポーツでなくてもよく、生活の中に身体活動を取り入れていけばよいと思います。具体的には、植木の世話やガーデニングが調査では9.6%となっています。65歳以上では12.9%となっています。このような活動も取り入れて、活動的な県民をつくっていくことも大事でしょう。高齢になってスポーツもできなくなったら、もっと身近なところで体を動かしていくということを健康づくりの一つの視点（柱）に入れていくというのもいいんじゃないかと思います。

佐久間会長 ありがとうございました。それではスポーツ医学を専門とする医師としての立場から笠次先生よろしく申し上げます。

笠次委員 笠次です。実は、前回の県スポーツ振興計画のとき、競技スポーツ部会の部会長として立案に関わっておりました。

私は、現在教育大にいますが、元々整形外科医なんです。整形外科医として、奈良県立医科大のスポーツドクターとしてスポーツ選手を、子ども達から高齢者まで治療をしてたんですけども、治療後もやはりまた、怪我して戻ってくる人達が多いんです。

選手の意識、それから指導者の意識、保護者の意識。この意識を変えるために教育大に赴任したんです。

私は、スポーツというよりも体を動かすということが本当に楽しい、体を動かすということの価値を、県民に伝えていくという、知事のいう奈良モデル、奈良だからできることがスポーツ推進計画のトップの所に上がってくるような形にしたい。

朝原委員の仰ったように昔は、僕らも山で遊んでいたのです。僕自身は丹波の田舎で育ちましたから、本当に川で死にそうになりながら頭に怪我をしたりとか、いろいろありますけれど、そんな親の知らないところで無茶苦茶なことをしていましたが、今はそれができない。

親の意識が変わっている。過去40年間、スポーツ振興センターのデータを見てみますと、確かに今の子ども達は怪我をしやすくなっています。40年前に比べると怪我の率というのは今の2倍以上になっている。2倍以上にはなっているんですけど、幼稚園・保育所に関しては15年位前がピークで逆に減っているんです。なぜか？いろいろなことが言われてますけども、親が危険なことをさせない。だから怪我をする機会がない。機会がないまま、小学校、中学校と進み、どんどん体が大きくなっていく、そこで、管理されたスポーツという形で進んでいきますと、スポーツをしているのだけれども、実際に怪我をしそうになったときに身体を守ることができないのではないかと感じます。

臨床の現場にいますと、怪我也二極化していると思います。スポーツをやり過ぎることによって起こる怪我、それと、何でこんなところで骨折するんだという怪我。

縄跳びしてて、肩の骨を折ってくる子がいるんですよ。二重跳びを何十回もやって。そういうところを考えたら、子どもの身体の根っこの部分を変えないといけない。そのためには、親の意識を、それから指導者の意識を変えていく、人を変えていかないといけないから、人を変えて行くにはどうすればいいのかという所をもっと突っ込んでいきたい。

少子化になっているその子ども達の親を根本的に変えていくような、社会体育からだけじゃなくて、学校体育からも両方から攻めていく必要があります。本当にスポーツ、だけではなく体を動かすということが好きということが重要なんです。

スポーツをしている人全員がオリンピックでメダル取れるわけではないですか

ら。整形外科の外来には故障して、本当に、もうスポーツが嫌いになる寸前の子達が一杯来ているんです。オリンピックなんて4年に1回ですから、メダル取れる人間なんてもうトップオブトップ、本当にひと握りのエリート選手だけです。

でも、私自身は、本当に低いレベルでも楽しいんですね。つまり、一番になれなくてもそれぞれのレベルでスポーツの楽しさをもっと伝えていけるような環境、箱物もそうですし、この奈良っていう大きな環境を使って、人を変える、環境を変えるという形で大きく包括するような、そういったプランが良いと思います。

でも、大きな理想を掲げても実際に市民にとって具体的にこんな良いところがあるということが必要です。いくら餅を絵に描いても実際食べ付いて来なければ話にならないので。知識があってもそれをいかに認知して行動に移していくかという部分が必要だと思います。

分かっているけどできない。奈良県の現状のところで説明のあった40代の働き盛りの方々は忙しいから身体が動かせないというものですが、このような人達が自然に体を動かしていけるような、そのような環境を作っていくことが大切だと考えています。

佐久間会長

ありがとうございました。

これまでの各委員の立場から発言いただきましたが、それらを受けて知事から、ご意見をいただきたいと思います。

知 事

大変熱心に、また有意義な意見いただきまして本当にありがとうございます。

全ての意見が有益でありましたが、いろいろな行政的な整理が必要だと思いますので、整理して次の施策の推進につなげていきたいと思います。

いただいた意見の整理の取っ掛かりですけれど、奈良県がスポーツ振興を一生懸命やりだした。これまでは、あまりやってなかったと思いますが、やりはじめですから、伸びしろがあります。これから頑張って伸びるぞとっております。

スポーツの振興を行い始めた切っ掛けは、小学校、中学校の体力レベルが全国40数位であること。学力は高いけど体力は低い。規範意識も43位と低い、暴力事案はワースト2。これは、由々しきことだということで始めました。思春期に運動する環境にないことが理由なのではないか。そこで、学校スポーツですけれど、小学校、中学校の芝生化を補助金つけて、始めました。

小学校、中学校は、市町村の整備の範囲なので、補助金がないと市町村長がなかなか乗ってきてくれません。つまり、維持費が大変だと、また、芝生が何の意味があるのかということもあったのですが、だんだん良くなって子どもが芝生でごろごろしてる結果を見て、大変良いと感じておられます。

奈良県の学生の生活を見てみると、塾時間が全国一番多いですね。

塾に行く時間が2時間以上ある。その結果ですけど、東大、京大の進学率が全国1高い。ダントツでずっと高いんですね。

そういうことを望まれる父兄もいらっしゃる。しかし、生涯に渡って学歴よりも体力のほうが大事ではないかと県は思って、体力を養成する環境を作ろうということが、スポーツ振興の最初の大きな動機なんです。

県営プールは、奈良市役所の前ですけども、大会の時に呼び出しなどで、うるさいと近所で苦情が出てきたんですね。また、プールも古くなってきているので、その場所で建て替えるというのは無理だから、場所を移して立て替えられないか、立て替えるときは是非PFIの方式でやっていこうと考えました。施設だけ作って県の管理というのは本当にサービスが悪い。

既存の施設もPFIや委託、指定管理で行うと良くなる面があります。そのような経営と運営とを一緒に、公設・民間運営というタイプの成功例が出てきているので、県議会にもご理解いただいて、そのような方式があるんだ、目新しいからと反発しないでやってみろよというようなことで始めた次第です。

もうひとつ大事なのは、スポーツ振興課というのは、元々教育委員会にありました。教育委員会にしか置いてはいけないという法律があったためですけども、市町村のスポーツ振興課もまだ教育委員会にあるものが多いと思います。ただ、県はスポーツ振興課を知事部局にしました。

それで奈良マラソンもやっとできた、ということだと思います。

このように、知事部局のスポーツ振興課がやりだしている。市町村サミットでスポーツ振興課を是非、市町村部局に置くように、ということをお願いしたのですけれども、学校スポーツからクラブスポーツ・地域スポーツというのは文科省の大方針になっています。

これから、ますますクラブスポーツを地域でどう充実させるか、その場合に、運営を助成金で行うというのは、余り良くないと思います。助成金頼りにどうしてもなってしまう、助成金を出せ、出せという話になってしまう。それはあんまり良くないですね。

みんなで施設は安く使えるように、基本的な環境整備は行政が行う必要がありますが、運営はできるだけ自分達でもらうこと、これが絶対に元気がいいと思います。

せめて行政ができるのはその位だ、というように思います。大事なものは、首長の熱意とリーダーの熱意だと思います。

リーダーは、大変なご苦労されていますけれども、セカンドキャリアとしてやっていただいて、それを何とか支える仕組みが必要かと思います。人の支えが一番大事です。リーダーの支えには工夫がまだいるなど、今日のお話で思いました。

県民ニーズはどこになるのか、ということですが、健康は運動から維持できるというので、健康のために運動してほしいというのが大きな望みです。奈良県は、全国で自殺率が一番低いんですね。要介護率も低い。介護保険料が全国4位と低い。非常にパフォーマンスが良いんです。だから、それはアウトドアで散歩したりする環境がいいからということなんです。もっとスポーツしてもらいたい、プールでウォーキングしていただいたらもっと健康長寿が伸びる。どんどん進めて、全国の平均を上回る伸びにできると感じています。

課題は、成年のお父さん達が運動しないこと。これは、3割が県外雇用者であることが理由かなと思います。へとへとになって帰ってくるから運動する元気がない、通勤が運動みたいなものなので、すると退職されるとデビューもできないです。運動していないし、会社のスポーツもなかなかできない。

だから、どんどん地域デビューをしてもらおうというという、その導入がいる。それは、学校では不可能だから地域のスポーツクラブで、退職期にデビューして欲しいというのが、総合型地域スポーツクラブの1つに狙いのターゲットです。

そのお父さん達が運動すると健康で長生きできる。リハビリもしないし癌にもならないと、いうのが大きな狙いなんです。

もうひとつ、トップアスリートはどうするかっていうこと。トップアスリートはニッチを探してですね、ニッチで育成すればトップになるかもしれません。しかし、先程、辰野さんが言われたように、本当にスポーツが好きなのか勝負が好きなのか、本当にスポーツが好きな延長でトップになった、というパターンになれば本当に良いなと思います。

奈良マラソンで高橋尚子さんと有森裕子さんに来ていただいて、講習していただいた。それだけで凄く良い思い出になる。イベントをしてトップアスリートを招くのは、いいなあと思いました。

そういうイベントをする、その為の施設はいると思います。また、大規模な施設も不足しているので、何とかしたいなと思います。ただ、施設があればできるというわけでもない。積み上げ積み上げが必要だということ。本日は多角的な意見をいただきました。

実践して、少しでも良くなるように、その実践の結果がみんなに知ってもらえるように、特に県民の人に知ってもらいたい。スポーツが大事だということを知ってもらいたいなと考えています。

先程、県民ニーズはどこにあるのかという話について、何かスポーツしたいというニーズではないんですね。一番ニーズが高いのは、毎年アンケート調査で重要度調査というのをやっているんですが、やっぱり医療なんです。

健康についての医療をしっかりして欲しいということがあって、スポーツとい



うのは、実はずいぶん低いんです。しかし、スポーツは、健康に繋がるからといって意識を覚醒してもらうようお願いしたいというように思っています。

いろんな意見を得て実践すると、やっぱりそうだった、というように、後でそう思ってもらえるようなことがあると思います。本日いただいた委員の意識に従ってですね、行政が努力をするということが大事だななどに思って、纏めさせていただきたいと思います。

ありがとうございます。

佐久間会長

ありがとうございました。

委員の方々から寄せられた質問等について、知事から答えていただいたような形でした。

事務局から、その他の事項についての説明をお願いします。

吉田課長

その他の事項につきまして、今後のスケジュールでございます。本日は、様々なご意見を頂戴いたしました、どうもありがとうございました。

いただいた意見につきまして、今後、事務局で一端、整理したいと思います。

今後ですけれども、骨子、素案ということで、作業を開始したいと思っております。この過程の中では、委員の皆様方に意見などをいただきたいと思っておりますので、ご協力、宜しくをお願いします。

第2回目につきましては、9月を目途に考えております。そこで、案をご提示し、またご意見をいただき、計画案までレベルを引き上げてまいります。委員の皆様方に今後、個別に検討会をもっていただくこともあろうかと思っております。その際には、ご協力をお願いします。

12月に3回目の審議会を予定しております。ここで計画案をご提示したいと考えております。1月のパブリックコメントを経て、計画策定に持っていきたいと思っております。

以上でございます。

佐久間会長

ありがとうございました。この件につきまして、今後はただ今の説明いただいた日程に従って進めていきたいと思っておりますけれども何か、ご意見等ございませんでしょうか。

ないようですので、先程の日程に従って進めていきたいと思っております。それでは、事務局に返します。

中和田

佐久間会長ありがとうございました。また、委員の皆様ありがとうございました。

以上をもちまして、平成24年度奈良県スポーツ推進審議会第1回定例会を終了いたします。

本日は、ありがとうございました。

以上の事項は、事実と相違ないことを証明する。

平成24年 月 日

議事録署名委員

委員

印

委員

印